

範疇横断的研究 —「固体的範疇」と「液体的範疇」—

山岡 洋

キーワード

品詞, 範疇, 横断的, 固体的, 液体的, 境界, 主部, 述部

はじめに

本稿は、一見無関係と思われる様々な範疇の共通点に着目して、これまでの言語研究にはない「固体的範疇 (solid categories)」と「液体的範疇 (liquid categories)」という概念を導入し、「範疇横断的 (cross-categorically)」にその共通点を明らかにすることにより、人間の言語知識の内容や言語習得の過程の解明、英語教育の効果向上などに、何らかの一助となることを目指すものである。

セクション1では、品詞を名詞的な「主部の類 (subjective categories)」と動詞的な「叙述の類 (predicative categories)」に大別する「品詞二分論」を導入し、「可算性」という点に着目して主部の類が可算的であることを根拠に固体的範疇、叙述の類が可算的ではないことを根拠に液体的範疇に分類できることを述べる。セクション2では、セクション1での指摘に基づき、本稿で用いる「固体的」という用語と「液体的」という用語の定義をより明確にした上で、その定義のもとに分類されうる他の範疇を提示する。セクション3では、セクション2で提示した各範疇がどの程度固体的もしくは液体的であるのかを可能な限り詳細に検討し、固体的範疇と液体的範疇という区分が、明確な境界線によって分けられるものではなく、段階的なものであることを述べる。そして、最後にセクション4では、この固体的範疇と液体的範疇という二分法が、言語学という学問分野でどのような有用性を持つのかを検討しながら、残された問題も含め将来的な展望を述べる。

なお、本稿で用いる用語およびその定義は以下の通りである。

- (1) a. 主部：一般に言う「主語」の全体の部分。
- b. 述部：文の中心となる述語動詞とその述語動詞にとって不可欠な要素から成る部分。
- c. 修飾部：文もしくは述語動詞にとって必須要素ではなく、文全体もしくは文の一部を修飾する部分。
- d. 主要部：1語以上から成る「句」において、統語的に最も中心となる語。
- e. 補部：ある要素にとって不可欠な部分。具体的には、動詞や前置詞の目的語、動詞や前置詞の補語、動詞にとって不可欠な副詞的要素など。
- f. 文法的範疇：品詞・文の働き・ムード・テンス・ヴォイス・語形変化など、文

法機能に基づいて分類された範疇。形態論的範疇と統語論的範疇を合わせたものの。

- g. 意味的範疇：定性・総称性・モダリティー・時間指示・他動性など、形式が表す意味の種類に基づいて分類された範疇。
- h. 音声的範疇：母音／子音・音声素性・アクセント・リズムなど、言語音に関して分類された範疇。

1. 品詞二分論

語は、その果たす機能や表す意味に応じて分類することが可能である。時には形態論的な基準で、比較級・最上級の変化をするものを形容詞・副詞に分類したり、現在時制・過去時制の変化をするものを動詞に分類したり、時には意味論的な基準で「状態」を表す動詞を状態動詞、「動作」を表す動詞を動作動詞として区別したりすることがある。しかし、語の分類をこと品詞分類に限ると、その分類基準は主として統語論的な働きの違いになる。英語学でしばしば品詞の例として挙げられるものには次のようなものがある。

(2) 名詞、代名詞、冠詞、動詞、助動詞、形容詞、副詞、前置詞、接続詞⁽¹⁾
これらの品詞分類が主として統語的基準に基づいていることは、次の各品詞の定義から明らかである。⁽²⁾ [] 内には具体例を挙げる。

- (3) a. 名詞・代名詞：単独で主部の主要部になる。[desk, water, you など]
- b. 冠詞：名詞を補部にとって主部の主要部になる。[a(n), the, ø]
- c. 名詞的従属接続詞：時制節を補部にとって主部の主要部になる。
[that, if, whether など]
- d. 動詞：単独で述部の主要部になる。[know, make, put など]
- e. 助動詞：動詞を補部にとって述部の主要部になる。[can, must, do など]
- f. 形容詞・副詞：単独で修飾部の主要部になる。[good, early, very など]
- g. 前置詞：名詞を補部にとって修飾部の主要部になる。[at, of, with など]
- h. 副詞的従属接続詞：時制節を補部にとって修飾部の主要部になる。
[when, because, although など]
- i. 等位接続詞：文法的に同等の機能を果たす複数の要素を連結する。
[and, but, or など]

このように、品詞分類を純粋に統語的基準に絞って列挙してみると1つの大きなグループ分けが見えてくる。それは、主部の主要部になるグループと主部の主要部にならないグループである。

- (4) a. 主部の主要部になる品詞：名詞・代名詞・冠詞・名詞的従属接続詞
- b. 主部の主要部にならない品詞：動詞・助動詞・形容詞・副詞・前置詞・副詞的従属接続詞・等位接続詞

この大まかな品詞分類から見えてくるそれぞれのグループのイメージが、「固体的 (solid)」な

イメージと「液体的 (liquid)」なイメージである。その抽象的な2つの異なったイメージの根拠は、輪郭もしくは境界線が明確な範疇と、輪郭が不明確もしくは見えない範疇の違いで、固体的な範疇はその輪郭が明確であることから複数化が可能であり、輪郭が不明確な範疇は複数化が不可能である。以下では、(4a)のグループを「主部の類 (subjective categories)」, (4b)のグループを「叙述の類 (predicative categories)」と呼ぶ。

- (5) a. book / books, I / we, that / those, a (n) / \emptyset [主部の類]
 b. be / *bes, may / *mays, poor / *poors, very / *veries, with / *withs, because / *because, and / *ands [叙述の類]

ここで、主部の主要部になる品詞ではありながらも、複数形を持たないのが名詞的従属接続詞 (具体的には, that, if, whether) である。これは、セクション3でも触れるように、同じ主部の主要部になる品詞でも、より固体的な品詞からより液体的な品詞まで段階的に存在することを示している。名詞的従属接続詞は、主部の主要部になるという点では固体的な品詞であっても、複数化ができないという点では純粹に固体的な品詞とは言えず、やや液体的な色彩を帯びている品詞であると言うことができる。また、「a(n) / * \emptyset 」の対立は、可算単数名詞を導く不定冠詞のaもしくはanと可算複数名詞を導く不定冠詞である「ゼロ冠詞 (a zero article)」の対立を表しており、これも明確な単複の対立を成している一例である。

これまで、主部の類が固体的範疇で述部の類が液体的範疇であることを述べたが、ここで、(2)に関連して述べたように、この品詞もしくは主部の類と叙述の類という分類は、統語的な働きを基準にした分類で、それゆえ文法的範疇であることを再確認しておきたい。その上で言えることは、この固体的範疇と液体的範疇の区別は、文法的範疇に適用可能であるということである。セクション2以下では、本セクションで述べた「固体的範疇 (solid categories)」と「液体的範疇 (liquid categories)」の定義をより明確にした上で、その区別が他のどのような範疇に適用可能かを検討していく。

2. 「固体的範疇 (solid categories)」と「液体的範疇 (liquid categories)」

セクション1では、品詞を主部の類と叙述の類に分けた上で、それらのグループの主部になれるかどうかという特性と複数化ができるかどうかという「可算性 (countability)」に着目して、前者を固体的範疇、後者を液体的範疇としたが、ここで本稿で導入する「固体的」と「液体的」という概念の定義を明確にしておきたい。

- (6) a. 固体的: 「かたまり」のようなもので、時として境界線や輪郭が明確なもの。それに伴い、複数存在したり、繰り返されたりすることが可能である。
 b. 液体的: つかみどころのない漠然としたもので、原則として境界線や輪郭がない、もしくは不明確なもの。区切りがないことから、複数存在したり、繰り返されたりすることが不可能である。

この固体的／液体的の対立が他のどのような文法範疇に当てはめられるかを考えると、まず「可算性」という観点から、可算名詞と不可算名詞の対立にそのまま当てはめられる。

- (7) a. book / books, family / families [可算名詞]
 b. music / *musics, furniture / *furnitures [不可算名詞]

このように、複数化が可能な可算名詞は固体的範疇、複数化が不可能な不可算名詞は液体的範疇ということになる。上の (5) のところでも述べたが、名詞的従属接続詞が主部の類でありながらも可算性がなかったのと同じように、不可算名詞の場合にも、主部の類ではありながらも可算性については負の性質を持っているために固体的範疇の中でも液体的性質を有している範疇ということになる。

次に、同じ主部の類でも、常に名詞を後続させた形で主部の主要部になり得る冠詞に目を移そう。冠詞は大別すると定冠詞と不定冠詞に分けられる。定冠詞には the という語が1語しかないのに対して、不定冠詞は a(n) に加えて音形のないゼロ冠詞 \emptyset が存在する。(5) のところでも述べたがこの不定冠詞は可算性については正の性質を持っているために可算名詞単数の場合には a / an が用いられ、可算名詞複数の場合には \emptyset が用いられる。ところが定冠詞 the は、可算名詞の単数と複数の違いに関する区別がないため、この可算性という点では、不定冠詞は固体的、定冠詞は液体的ということになる。(8b) の「the / the」は単数・複数ともに the という形態が用いられることを表している。⁽³⁾

- (8) a. a(n) / \emptyset [不定冠詞]
 b. the / the [定冠詞]

ここでのポイントは、数に応じて形態を変化させるかどうかという文法範疇に関して不定冠詞は固体的、定冠詞は液体的であると言える点である。ここで、これらの語が表す意味に目を転じてみよう。「定性 (definiteness)」という点で見ると、不定冠詞はその名の通り「不定的 (indefinite)」性質を表し、定冠詞は「定的 (definite)」性質を表す。

- (9) I ordered a hamburger and \emptyset salad. The hamburger was nice but the salad was terrible.

前半文で用いられている不定冠詞の a と \emptyset は、漠然とそれぞれの物体の輪郭を明確にせずに提示しているのに対し、後半文に用いられている定冠詞の the は、既に一度導入されている物体であるためにその輪郭を明確に提示している。不定冠詞が意味的には輪郭が不明確なものを提示するのに対して、定冠詞は意味的に輪郭が明確なものを提示する証拠に、総称文において、定冠詞は特に「他の種と区別される場合」(Quirk et al. (1985: 281)) に用いられる。

- (10) a. *The bull terrier* makes an excellent watchdog.
 THE CLASS AS REPRESENTED BY ITS TYPICAL SPECIMEN
 b. *A bull terrier* makes an excellent watch dog.
 ANY REPRESENTATIVE MEMBER OF THE CLASS
 c. *Bull terriers* make excellent watchdogs. (Quirk et al. (1985: 281))
 UNDIFFERENTIATED WHOLE

このように、不定冠詞はそれが伴う名詞の種については「任意のひとつ」か「漠然と全体」を指すのに対して、定冠詞は「他の種との区別された上での(個体ではなく)種を指す」という明確

な「線引き」を行うのである。つまり、不定冠詞と定冠詞は、文法範疇としては、可算性という点で不定冠詞が固体的、定冠詞が液体的と言えるが、一方で意味範疇としては、定性 (definiteness) という点で不定冠詞は液体的、定冠詞は固体的と言えるのである。

ここで注意すべき点は、定性という概念の定義である。定性に関する「定 (definite)」「不定 (indefinite)」の対立は、根本的に特定性 (specificity) の「特定 (specific)」「不特定 (non-specific) (もしくは総称的 (generic))」の対立とは異なる。この相違は、具体的には次の例によって説明される。

- (11) a. A tiger is a dangerous animal. [不定/不特定]
 b. I have a red car. [不定/特定]

(11a) における tiger や dangerous animal は話し手がある特定の tiger や dangerous animal を念頭に置いているわけではない。その意味である種の不特定の個体を表していると言える。一方、(11b) の場合、話し手は自分が所有している車であるから特定の車をイメージしながらも、聞き手は自分の車を具体的にはイメージできないであろうと判断した結果、不定冠詞が用いられている。このように、特定/不特定という概念が話し手の頭の中でどのようにイメージされるかに関わる概念であるのに対して、定/不定という概念は、聞き手が頭の中でどのようにイメージできるかという話し手の判断に関わる概念なのである。

この、特定/不特定とは異なる定/不定の概念で、定冠詞/不定冠詞の違いと共通するのが、単純過去時制の表す時間指示と現在完了形が表す時間指示である。

- (12) a. John left at four. (Giorgi and Pianesi (1997: 85))
 b. *Chris has left York *some ten years ago*. (Klein (1992: 525))
 c. I've been to Carnegie Hall *only once*. (Allen (1966: 156-57))

原則として、単純過去時制は (12a) のように定過去 (definite past) を指示する要素とは共起できるが、現在完了形は (12b) のように定過去を指示する要素とは共起できず、(12c) のように不定過去 (indefinite past) を指示する要素との共起しか許されない。ただ、この時、(12c) の話し手は、自分がいつカーネギーホールに行ったのかを知らないはずはなく、ただ聞き手がいつかは知らないだろうという判断のもとで、言語表現上、不定表現を用いているだけで、この事情は (11b) において話し手が自分の車がどの車か知らないはずがないのと同じである。このことから、冠詞の場合に、意味範疇として不定冠詞が液体的範疇であり定冠詞が固体的範疇であるのと同じように、現在完了形の場合には意味範疇としての時間指示が不定的であることから液体的であり、単純過去形は意味範疇としての時間指示が定的であることから固体的であると言えるのである。

この定冠詞/不定冠詞および単純過去時制/現在完了形が表す定性について、Leech (2004: 42) はその共通点を次のような例で説明している。

- (13) a. Two teenagers and a 10-year-old girl were caught in the crossfire. The girl was taken to hospital for emergency treatment, but fortunately her wounds were not serious.

b. A: I've only been to Switzerland once.

B: How did you like it?

A: It was glorious — we had beautiful weather all the time.

(13a) では、前半文で two teenagers と a 10-year-old girl が、初出のものであることからゼロ冠詞および不定冠詞によって導入されている。次に後半文では、既に登場している旧情報として、the girl および her という定表現で表されている。このように談話の中では、新情報が不定表現によって導入され、旧情報が定表現によって示されるのが原則であるが、これと同じように、(13b) では、談話の最初は現在完了形によって不定時で導入され、その後で話し手と聞き手がどの時点を指しているか情報の共有ができるようになるために、単純過去時制によって定時が示される流れになるのである。Leech (2004: 43) では、次のような例を挙げ、名詞の定性が動詞の時間指示の定性にも影響を与えることがあることを指摘している。

(14) a. John has painted a picture (of his sister).

b. John painted this picture.

(14a) では a picture という不定名詞句と has painted という不定時間指示の相性がよく、(14b) では this picture という定名詞句と painted という低時間指示の相性がいいということであるが、これこそが本稿での主張である範疇横断的概念の存在を裏付けるものであり、さらに言うと、この定性の範疇横断の性質の延長上に本稿の主張である固体的／液体的概念の対立が存在するのである。

次に、定性と同じく意味範疇の分類として、状態動詞と動作動詞の対立に話を移すことにする。「状態」と「動作」はその動詞が表す意味であるが、その意味特性の違いに応じて、文法的にも様々な違いが現れる。原則として、状態動詞は、状態の意味を表す文法形式である進行形では用いられない。

(15) *Max is knowing the answer. (Lakoff (1970: 840))

これに対して、動作動詞の中には進行形で用いられると、反復動作を表すものがある。

(16) a. He was nodding his head. (Quirk et al. (1985: 208))

b. And now the subject is coughing. (Comrie (1976: 43))

動作動詞には進行形で用いられると反復を表すものがあり、一方で状態動詞が原則として進行形で用いられないという事実は、(5) で見た主部の類には複数形になるものがあり、叙述の類には複数形になるものがないという事実と平行する。このことから、意味範疇として、動作動詞は固体的であり、状態動詞は液体的であると言えるのである。これは、主部の類の中にも固体的な範疇と液体的な範疇が混在していたように、叙述の類の中にも液体的な範疇と固体的な範疇が混在していることを示している。

今度は、状態動詞と動作動詞の区別と同じように、叙述の類に属する範疇として動詞の活用形である原形不定詞と現在分詞が知覚動詞の対格付き不定詞補文に用いられた場合の違いについて検討してみる。

(17) a. I saw him cross the street.

- b. I saw him crossing the street. (Vendler (1967: 114))

(17a)は、「彼が通りを渡る」という事象を完結したものとして捉えており、いわばその事象の輪郭が明確になっていると言える。一方、(17b)は、「彼が通りを渡る」という事象の途中を捉えているものであり、「彼が通りを渡る」という事象全体がどうなっているかという輪郭は不明確である。その証拠に、この直後に彼が引き返したり、車にひかれたりするなどして通りを渡り終わらないこともあり得る。このように輪郭が明確であるかどうかの違いは、次のように図示される。

- (18) a. I saw him cross the street.



- b. I saw him crossing the street.



(18a)は「彼が通りを渡る」という事象を丸ごと全体として捉えていることを、(18b)は「彼が通りを渡る」という事象全体には触れず、その一部のみを捉えていることを、それぞれ表している。特に(18b)については、(18a)との対比を明確にするために点線で事象全体を表しているが、言語表現そのものは事象全体については全く触れていない。故に、(18b)の場合には事象全体の輪郭は不明確となり結果として液体的な表現ということになる。

当然のことながら、この違いは単純時制と進行形の違いに相通ずるものがある。

- (19) a. She works for an engineering company. (OALD⁸: s.v *work*)

- b. Some of the retired professors are still working as part-time teachers.

(江川 (1991: 349))

- (20) a. The dog drowned in the sea.

- b. The dog was drowning in the sea. (Leech (2004: 20))

(19a)では彼女の仕事がフルタイムの仕事であることが単純現在時制によって暗に示されている。このことにより、彼女の職業が明確にされ、彼女の属性の一角が明確になる。したがって、単純現在時制は固体的ということになる。一方、(19b)の進行形によって表されているのは文意からも分かるように一時的な非常勤の仕事である。このような一時的な表現からは、その主語の属性などの輪郭は明示されないため、進行形は液体的な範疇ということになる。(20a)では、「犬が溺れ死ぬ」という事象が丸ごと完結したものとして提示されているために「犬は死んだ」という意味になるが、(20b)では、事象全体の途中が一部表現されているだけであるため、「犬が溺れ死ぬ」という事象は完結したことにならず、「犬はまだ生きていた」という意味になる。つまり、単純過去形は事象が完結したものとして明確な輪郭を持つ固体的範疇に分類されるのに対し、進行形は事象全体を描く輪郭を持たない液体的範疇に分類される。

ここまで、文法的範疇と意味的範疇を横断する固体的／液体的範疇の存在を指摘してきたが、ここでこの対立が音声的範疇にも当てはまることを指摘する。音声的範疇の代表的分類のひとつに母音と子音の区別がある。この母音と子音の区別に関しても、母音を液体的範疇に、子音を固体的範疇に入れることにより分類が可能である。その根拠は、母音が連続する場合し

ばしば2音節ではなく1音節になるが、その連続が子音によって区切られると完全に2音節に分断される。

(21) a. [e] (1音節) + [ə] (1音節) = [eə] (air) (1音節)

b. [pen] (1音節) + [səl] (1音節) = [pen-səl] (pen-cil) (2音節)

(21a) の場合には、液体的である母音同士を隣り合わせると、お互いに境界線がないために同化してしまうのに対し、(21b) の場合には、液体である母音が固体である子音によって仕切られているために、母音同士が一体化することができず分離した状態で独立した音節を形成すると考えられる。(4)

3. 固体的範疇と液体的範疇の区別の段階性

前節では、冒頭で固体的範疇と液体的範疇の定義を明確にした上で、具体的にはどのような範疇に固体的／液体的の対立を当てはめられるのかを、文法的範疇・意味的範疇・音声的範疇に分けながら見た。ここでその分類を一覧してみる。

(22) 表1. 固体的範疇と液体的範疇

	固体的範疇	液体的範疇	レベル	基準
a.	主部の類	叙述の類	文法的範疇	可算性
b.	名詞・冠詞	名詞的従属接続詞	文法的範疇	可算性
c.	可算名詞	不可算名詞	文法的範疇	可算性
d.	不定冠詞	定冠詞	文法的範疇	可算性
e.	定冠詞	不定冠詞	意味的範疇	定性
f.	単純過去時制	現在完了形	意味的範疇	定性
g.	動作動詞	状態動詞	意味的範疇	可算性
h.	原形不定詞	現在分詞	意味的範疇	完結性
i.	単純時制	進行形	意味的範疇	完結性
j.	母音	子音	音声的範疇	連続性

このように、様々な範疇を大まかに固体的範疇と液体的範疇に分類することにより、学校教育で文法事項を導入する際に、例えば原形不定詞と現在分詞の違いを単純時制と進行形の違いになぞらえたり、単純過去時制と現在完了形の違いを定冠詞と不定冠詞の違いになぞらえたりすることにより、それぞれの違いを単にことばによる理屈だけではなく、英語の他の文法事項との比較を通して感覚的に習得できるようになる。

ここで、特にこの中で、(22b, c, d, e, f, g, h) は一種の自己矛盾を抱えているように見える。不可算名詞は主部の類で固体的ではありながらも可算名詞との関係では液体的である。冠詞も主部の類であるから固体的であるが、可算性については不定冠詞が固体的で定冠詞が液体的、定性については定冠詞が固体的で不定冠詞が液体的である。動詞は叙述の類であるから液体的であるが、同じ可算性に関して、動作動詞は固体的であり、状態動詞は液体的である。同じ動詞で、原形不定詞は固体的で現在分詞は液体的である。同じく動詞で、単純時制は固体的であ

るが、進行形は液体的である。このように、一見矛盾しているように見える状況をどのように解釈すればいいであろうか。

まず、固体的／液体的という区別が、明確に区切ることができるものでなく段階的なものであると捉えたと、一見矛盾しているように見える分類も整理されて見えてくる。例えば、同じ固体的範疇の中にも、可算名詞や不定冠詞のようにより固体的な範疇がある一方で、不可算名詞や定冠詞のようにやや液体的の性質も併せ持っている範疇もある。また、同じ液体的範疇の中にも、現在完了形・状態動詞・現在分詞・進行形のようにより液体的な範疇がある一方で、単純過去時制・動作動詞・原形不定詞・単純時制のようにやや固体的の性質も併せ持っている範疇もある、と考えるのである。

それでは、冠詞について、可算性については不定冠詞の方がより固体的であるのに対して、定性については定冠詞の方がより液体的である点についてはどのように考えればいいか。それは、範疇の種別によって、それぞれの範疇の中で固体的／液体的区別が独立して（もしくは区別して）存在していると考えることによってその矛盾も解決できる。

また、母音と子音の区別について、その中間的存在に [j], [w] という半母音が存在する。これらの音は英語では子音として扱われるために、a week, a yellow carのように不定冠詞はanではなくaが用いられるが、一方日本語では「ウィーク」「イエロー」のように、少なくとも文字上は母音を用いて標記する。これらは言語によって固体的な扱いを受けるか液体的な扱いを受けるかが変わるまさにその中間に位置する要素と言える。

この、固体的から液体的へ移行する段階性と、文法的・意味的・音声的レベルによって分断された固体的／液体的範疇の考え方を一覧表にすると次のようになる。

(23) 表2. 固体的範疇と液体的範疇の段階性

	固体的	やや固体的	やや液体的	液体的
音声的範疇	子音	半母音		母音
文法的範疇	主部の類			叙述の類
	名詞・冠詞	名詞的従属接続詞		
	可算名詞	不可算名詞		
	不定冠詞	定冠詞		
意味的範疇	定冠詞	不定冠詞	動作動詞	状態動詞
			単純過去時制	現在完了形
			原形不定詞	現在分詞
			単純時制	進行形

ここで、音声的範疇・文法的範疇・意味的範疇の間には便宜的な区別はあっても明確な境界線は存在しないものと考えられる。それは、この図が主張したい固体的範疇と液体的範疇の境界線は明確でなく段階的であるのと同様である。

おわりに

本稿では、新たに固体的範疇と液体的範疇というこれまでにはなかった概念を導入して、これらの分類が音声的範疇・文法的範疇・意味的範疇にわたって横断的に適用可能であることを論証した。これらの範疇の存在そのものや、この分類の妥当性については、今後の研究によって検証されなければならないが、本稿の冒頭でも述べたように、このような主張をした裏には、言語知識・言語習得・言語教育に関する様々な解明されていない問題の存在がある。つまり、人間の言語知識は極めて複雑かつ膨大なものであるが、それらをまとめ上げるもととなる何らかの束となる範疇があるはずである。さもなければ、人間の言語習得が生後3～4年という短期間にほぼ完了するという事実が説明できない。このように複数の言語範疇を束ねる概念の存在が明確になれば、言語知識の内容や言語習得の過程を明らかにするのみならず、英語教育の効果向上にも役立つことは確実である。

本稿では、固体的範疇と液体的範疇の区別に加えて、音声的範疇・文法的範疇・意味的範疇の区別の重要性も訴えてきた。しかし、その一方で、このような区別は常に段階的である可能性があり、実際、固体的範疇と液体的範疇の中間に位置する要素として、半母音を具体例として挙げた。同じように、音声的範疇・文法的範疇・意味的範疇も明確に区別できるものではなく、それぞれの中に位置する範疇が存在するはずであるが、この問題の解明は今後の課題である。また、固体的範疇と液体的範疇の区別が適用できるような範疇が本稿で述べた範疇以外にどのようなものがあるのか、さらには固体的／液体的という対立が適用できる場合と適用できない場合の間にはどのような基準があるのかも含めて、今後の課題として指摘しておきたい。

註

- (1) 本稿では、「間投詞 (interjections)」は、考察の対象外とする。それは、その他の品詞が文中で主部・述部・修飾部・連結といった何らかの文法的働きをするのに対し、間投詞はそのような文法的機能を果たさないからである。
- (2) この定義は、それぞれの品詞の統語的機能に着目して定義したものであるが、この中で、特に(3b)に関して、冠詞が名詞を補部にとるという発想は生成文法のDP (Determiner Phrase) 分析に基づいたものである。生成文法では冠詞類を「決定詞 (Determiner)」という範疇に分類し、決定詞と名詞の結びつきについては、決定詞が主要部で名詞が補部であると分析する。詳細についてはAbney (1987) 等を参照されたい。
- (3) ここでの議論は、可算名詞に限った議論で、その範囲を不可算名詞にまで広げると、a(n)は明確に1という数に対応するのに対して、 \emptyset とtheは漠然とした数に対応することになる。このように考えると、aは固体的、 \emptyset とtheは液体的ということになる。
- (4) 母音同士が隣り合っても一体化せず独立した音節を形成することもある。例えば、頭字語でAOLの場合には[ei-ou-el]と3音節になる。また、子音の場合にでも、必ずしも音節を分断せず、子音同士が同化する場合もある。例えば、Would you...? の場合には、本来的に語レベルでは[wud][ju:]と発音されるが、句のレベルになると/d/と/j/が同化して[wudʒu:]と発音されることがある。ただ、原則論としては、母音は同化されず、子音は同化されないため、正確な表現としては、「母音同士は同化されやすく、子音同士は同化されにくい」となろう。

引用文献

- Abney, S. (1987) *The English Noun Phrases in Its Sentential Aspect*, Ph.D. Diss., MIT.
- Allen, Robert Livingston (1966) *The Verb System of Present-Day American English*, *Janua Linguarum* 24, The Hague: Mouton,.
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*, Cambridge: CUP.
- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』改訂三版, 金子書房, 東京.
- Giorgi, Alessandra and Fabio Pianesi (1997) *Tense and Aspect: From Semantics to Morphosyntax*, Oxford Studies in Comparative Syntax, Oxford: OUP.
- Klein, Wolfgang (1992) "The Present Perfect Puzzle," *Language* 68 (3), 525–552.
- Lakoff, George (1970) "Tense and Its Relation to Participants," *Language* 46 (4), 838–849.
- Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English Verb*, 3rd ed., London: Longman.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman.